

特集〈時間〉

輝く時の喪失

永倉みゆき



食卓に季節感がなくなったといわれて久しい。ハウス栽培やバイオテクノロジーの発達のおかげで、冬でも胡瓜やトマトが食べられる。そのかわり、野菜のうま味は確実に薄らいできた。いや、それは食

卓だけの話ではない。朝早くから夜遅くまで賑やかに流れ続けるテレビ。お正月であっても普段と変わりなく営業を続けるコンビニエンスストア。以前、現代は、便利になり物が豊富になったために

“特別な時”を演出するのが難しくなりましたと聞いたことがある。どんどん世の中が均質になってきているような気がするの、私だけではないだろう。

“都会”や“田舎”という言葉についても同様のことが言える。ほんのひと昔前まで、静岡はもっとしっかりと地方都市の顔をしていたように思う。いつでもどこでも欲しいものが手に入る便利さはな

かったかわりに、未知のものに対する憧れがあり、待つ楽しみがあった。

私の幼い頃の最大の楽しみといえば、四月はじめにある、静岡祭りであった。その昔、徳川家康公が余生を楽しんだと言われている駿府城の跡地、駿府公園を中心に、大御所花見行列と呼ばれる大名行列に扮した人達が、街中を練り歩く。その日ばかりは、目抜き通りからも車はしめ出され、浅間神社から駿府公園に至る通りの両側には数々の露店が並び、街の様相は一変する。普段は、街の顔役だと言わんばかりにでんとそびえるデパート達でさえ、その日はかすんで見えるほど、通りは小さな出店のワクワクするような活気に溢れ返るのだ。ところがまた指折り数えてお祭りの日を待っていると、必ずその頃に雨が降る。待ちに待った日の朝、早く起きてしとしと降る雨を見た時のがっかりした気持ちといたら。。。だから四月という文字を目にすると、「新学期」や「春」のイメージとは別に、その期待

と失望の入り混じった複雑な気持ちが胸に甦ってくる。あの頃は確かに、『四月』という月には、特別な思いが込められていた。

しかし、今や静岡祭りと言っても、かつてのような精彩に欠けるように感じるのは、私が歳をとったせいなのか、はたまた毎日が刺激の多いお祭りのような日常になったためなのか。多分それは両方言えることだろう。輝いている日のあったあの頃が懐かしい。今ではクリスマスもお正月も、前日と同じ速さで淡々と過ぎていくばかりだ。

子どもの生活にもそんな影が見える。やりたいこと、欲しい物がたやすく手に入ってしまう。と同時に、より幼い時期から、大人のような時間の区切られた生活に組み込まれていく。幼稚園にしても既に、「家庭」と対比される特別な場ではなくなってきた。このあと〇〇教室に行くの」「私は△△という会話を耳にすると、そういうスケジュールをこなしている今の時代の子にとって、幼稚園に

行く時間だけが、輝いた、或いは母と別れるつらい時間ではないことを感じる。子どももまた、年々歳々均質な生活時間の中で生かされようとしている。エンデの『モモ』に出てくる時間泥棒ではないが、現代という時代は、子どもからさえ、輝く時を過ぐすという楽しみを奪い、淡々と時を積むことをさせようとしているような気さえしてしまう。

しかし、先日面白い発見があった。絵画教室をやっている友人が、“文字を意味としてでなく記号（絵柄）として表現している段階の絵”だと見せてくれたものを見て、あっと驚いたことがある。それは四歳の子の作品でそこには自分の名前と見られる字の横に、大きくはつきり“5”と描いてあった。実は、それとよく似たものを私も見たことがあったのだった。それは、年中児の担任だった時に、用品の襖にみんなで絵の具で描いていた時のこと、様々な絵に混じって、大きな襖いっぱい、踊るよるなりズムで、“5”の文字が行列している作品

(?)があった。それを描いたじゅんちゃん、生まれで、幼稚園でも何回となく友だちから、「おまえ何歳だ、言ってみろ。オレは5歳なんだぞ」と言われてきたのだろう。年中児にとって“5歳”ということは、黄門様の印籠以上の威力がある。憧れの年齢5歳。そのかっこよさの象徴“5”。欲しくてもすぐに手に入らぬ数字“5”。多分じゅんちゃんだけでなく、年中の多くの子にとって、5は、1、2、3、4、と並ぶ同じ重さの数字ではなくて、特別な意味のある数字だったのだろう。生活にメリハリ感が薄らいできたとはいえ、子どもにとっただけはまだ、輝くもの、輝く時は存在するかもしれない。うちには二歳半の息子がいるが、彼にとっちは、今より前にあったことはすべて、「きのう○○したね」になってしまう。おそらく彼には、今だけが特別な意味のある生きた時間なのだ。それがきっと成長につれて、昨日との関係がわかり、明日につながるっていき、じゅんちゃんのように憧れの時がで

き、それを待つ楽しみを知っていくことだろう。  
そう思えば思うほど、心の柔らかな幼い時代こそ、  
はりきって次のステップに移る練習ばかりさせ

ず、その時期にしか味わえない新しい発見やものの  
出会いを大切にしてやりたいと思う。  
(静岡大学教育学部附属幼稚園)

## 心理療法における時間

安島 智子



心理療法における時間について述べるに際し、ま  
ず「遅れ」を伴った男児の事例を取り上げることが  
ら始めようと思う。

〈事例〉  
五歳の男の子である。一歳半健診の時に自閉傾向

と言われて二歳二か月から、地域の機関に通って  
いた。最近その機関の医者に「来年は小学校入学だけ  
れど、特殊学級が適当でしょう。将来は施設に行く  
ようになることを覚悟して下さい」と言われたとい  
う。自閉傾向を伴った発達遅滞ということだ。ほか  
に治療機関はないかと探したところ、「このはな